

ポルトガル語など、初めて聞く言葉に子どもたちは興味津々。もちろん、子どもたちも自分の母語で読み聞かせに挑戦しました。

その後は、就寝時間まで体育館で思いっきり遊びました。この時間が一番楽しかった、と感想を言ってくれた子どももたくさんいました。小さな子どもたちは、スポーツが上手なお兄さんたちを憧れのまなざしで見っていました。日本語がまだ不十分なので学校ではおとなしくしている中学生たちが、ヒーローとなって輝ける瞬間です。大人たちも、翌日の筋肉痛を心配しながら一緒に汗を流しました。

2日目のメインイベントは、野外ウォークラリー。班ごとに歩いて、チャーリーの愛称で子どもたちの心をつかんだ日下部誠一さんが隠したものを見つける競技です。子どもも大人も「地獄の散歩」と言いながらも、お天気に恵まれ楽しそうに、広い場内を歩いていました。

いよいよお別れ。閉会式で子どもたち一人ひとりに聞きました。「初めに約束した新しい友達は見えましたか？ 新しい友達の名前を教えてください」。子どもたちは全員、友達の名前を言ってくれました。言われた子どもは、はにかみながらも嬉しそうでした。

今回の宿泊交流会は、子どもたちがリフレッシュ

できる良い機会だったと思います。また保護者の皆さんも、国籍を超えて仲良く情報交換をしていました。保護者の方たちが国ごとにまとまり他の国出身の方とあまり交流しなかったらどうしよう、と心配したのですが、その心配は全くの杞憂でした。

参加者の皆さんにとっては楽しい2日間でしたが、スタッフにとって肝を冷やす事故が起きました。参加したお子さんが全治1か月の怪我をしておきました。幸い命に別状はありませんでしたが、主催者の安全管理、危機管理を厳しく問い直さなければと深く反省しました。少ないスタッフで、日本語の専門家でしかない私たちが、宿泊交流会を実施することは無謀なのかもしれないとも思いました。しかし、子どもたちや保護者の方の笑顔や、「参加してよかった。ぜひ来年もやってください」という声を聞くと、安全管理をしっかり学んで、体制を整え、来年も実施したいと思えてきます。危機管理体制をいかに強化していくかが、私たちの課題です。

最後になりましたが、共催としてご協力くださったEIWANさんと、参加してくださったすべての皆さんに、心から感謝いたします。子どもたちの笑顔のために、今後とも私たちの活動を暖かく見守っていただけましたら幸いです。ありがとうございます。



福島移住女性支援ネットワーク (EIWAN)

〒960-8055 福島市野田町2-3-2 神野ビル3F東 (JR福島駅西口から徒歩7分)
電話 080-8215-1556 メール eiwan311@gmail.com
ホームページ <http://gaikikyo.jp/shinsai/eiwan>
フェイスブック <https://www.facebook.com/eiwanfukushima>

送金先 郵便振替口座番号：00920-0-144820
口座名称：福島移住女性支援ネットワーク



福島移住女性支援ネットワーク (EIWAN)

Empowerment of Immigrant Women Affiliated Network

第17号

◆発行◆ 2016年11月21日 (隔月刊)

第2回ふくしまフォーラムを開催



▲力強く演じてくれた子どもたちと、その移住女性のお母さんたち。
そして激励に駆けつけてくれた駐新潟中国領事館・仙台韓国教育院・福島県国際交流協会などの来賓

11月19日、郡山市中央公民館で第2回ふくしま子ども&移住女性多文化フォーラムを開催した。当日は雨にもかかわらず、外国にルーツをもつ子どもたちが約60人、移住女性たちが約60人、一般参加者をふくめて計170人が参加してくれた。その中には今夏、福島の移住女性とその子どもたちを迎えて京都と和歌山で保養プログラムを実施してくれた関西の方々も、会場に駆けつけてくれた。

第一部では7教室の子どもたちによる文化発表が披露された。ハンブルク学校宮城(仙台市)・山形ムンギンハ学校(山形市)、瀛華(いんか)中文学校(仙台市)、上越中文教室(上越市)、日中文化ふれあいの会~幸福(郡山市)、福島多文化団体~心ノ橋(いわき市)、つばさ~日中ハーフ支援会(須賀川市)の子どもたちが、韓国語あるいは中国語で劇を演じ、歌を合唱し、詩を朗読した。その一人一人の表情は、

じつにほほえましく、かつ遅しかった。

第二部では、継承語=母語教室を自力で運営している移住女性グループの代表者7人による報告と提案がなされた。そして最後に、「ふくしま移住女性アピール2016」が朗読された。

移住女性たちが心を込めて書いたアピールの最後に、こうある。「私たちは、これからがんばります。ただ、私たちを孤立させないでください」。

須賀川、いわき、郡山をはじめ、仙台、山形、上越の継承語教室は、これからも移住女性のお母さんたちによって続けられていく。そして私たちEIWANは、今後とも彼女たちを支援し、また協働してさまざまなプログラムを実施していきたい。その思いを、新たにされた一日であった。

●佐藤信行 (EIWAN 代表)

●ふくしま移住女性アピール2016●

東日本大震災から、すでに5年7カ月が経過しました。私たちはきょう、福島県郡山市で「第2回ふくしま子ども&移住女性多文化フォーラム」を開催しました。第一部では、福島県、宮城県、山形県、新潟県でおこなわれている継承語教室（中国語／韓国語教室）に通う子どもたちの発表があり、第二部では、各教室の報告と、移住女性たちの切実な願いについて話し合いました。

私たち移住女性は、日本社会の一人の構成員として、日々、平凡に暮らしています。母として、妻として、仕事をもつ女性として、日本社会の小さな一助になるために、日々、努力しています。

ただ、一つ違うのは、私たちには日本語や日本の文化以外に持つ固有な言語と文化がある、ということです。そして私たちは、私たちが持っている母語と文化を、自分の子どもに継承させたいと願っています。なぜなら、それが、私たちが自分の子どもと意思疎通する手段であり、自分の子どもたちに残せる資源だからです。

しかし、ある人は言います。「ここは日本だから、子どもに弱小国の言語と文化を教える必要はない。日本語と日本文化に精通すればいい」。また、ある人は言います。「日本で生まれて育った子どもに、あなたたちの言葉や文化を教え込むと、アイデンティティの混乱だけが生じる」。中でも一番響くのは、次の言葉です。「子どもが、親のルーツでいじめられる」。

かつて、私たちの先輩たちは、実際にそのような差別を受け、中には自分たちのルーツを隠したり、中には閉鎖的な移住者コミュニティを作ったりしました。しかし、私たちはここで宣言します。そのような考えは、もう旧時代のものです。

私たちは2011年の東日本大震災で、いやになるほど経験しました。それは、毎日のようにさんざん言われた「キズナ」の重要性です。家族内の絆、地

域社会内の絆、国民としての絆、さまざまな絆が言われましたが、その中には国際社会との絆も大きかったと思います。そして私たち移住者は、日本社会と国際社会をつなぐ「キズナ」の橋渡し役ができるということに気付かされました。

私たちが、子どもたちに自分の母語と文化を継承させたいと思うのは、将来、子どもたちが日本と国際社会をつなぐ役割をしてほしい、という願いを込めてです。そして、その役割を通して、私たちも日本社会に寄与できるということなのです。

ただ、このような志から始めた私たちの活動は、必ずしも、たやすいものではありません。手弁当で、自分の時間と能力と経費を使いながら奮闘しています。平凡な私たち移住女性の力だけでは、いつまで続けられるかも不安です。移民政策を公式化しない日本政府の方針により、自治体からの後押しを得ることも難しいというのが現状です。私たちの活動に、日本人の支援者を得るのも大変です。

他国や他県では、このような継承語教育、母語教育が議論され、学校教育の中に含まれるケースもあると言われますが、ここ東北では、そういう動きまでにはまだ至っていません。

むしろ、子どもたちが中学生以上になると、一律化された教育システムの中で内申書に反映されるクラブ活動のみが優先され、継承語教室に通えなくなるのが一般的です。多様性を育てなければならない学校教育が、逆に多様性を失わせる結果になっていると言わざるをえません。教育委員会の方々は、子どもたちの多様な活動が学校教育現場で認められるような仕組みを、ぜひ検討してください。

私たちのこのような願いは、私たちだけの提案ではありません。日本の教育現場に、より多様さを認める仕組みで、イジメをなくし、多様な子どもたちが生き生きと教育を受けることができるのではないかと、思います。

継承語教室を運営し地域社会と交わる私たちたち

のさまざまな取り組みが、その小さい一歩でありたいのです。私たちは、これからもがんばります。ただ、私たちを孤立させないでください。

私たちは多くの方々と連携しながら、子どもたちの未来のためにも、私たちが住むこの社会を、多様さで豊かな社会に築いていきたい、と思います。

<多文化キッズキャンプ福島2016>報告

●日下部喜美子（蓬萊日本語教室）

多くの方々の協力のもと、今年も6月18～19日、国立磐梯青少年交流の家で宿泊交流会を実施することができました。

家庭の事情で海外から日本に移住してきた子ども、日本生まれでも長期間海外で生活し帰国した子ども、日本生まれ日本育ちだが保護者が外国出身で2つの文化の中で生活している子ども、日本滞在年数も、母語も、日本語のレベルも、年齢も、国籍もさまざまな「外国にルーツを持つ子どもたち」25人とその保護者11人が、1泊2日のキャンプを楽しみました。

福島県は、外国出身者が広い県土に分散して住んでいる外国人散在型の地域です。それに伴って、「外国にルーツを持つ子ども」たちも、学校にただ一人の存在として在籍することが多く、同じ境遇の仲間と会う機会が少ない状況です。そこで、子どもの日本語教室を開催している県内5つの日本語教室の有志が集まって、2014年から、この「多文化キッズキャンプ福島」が開催され、今年で3回目となりました。

開催の目的は2つあります。孤軍奮闘している子どもたちに、仲間と出会い勇気と希望を持ってもらうこと。保護者の皆さんには、子どもを日本で育てるために不足している情報を提供し、保護者同士のネットワークを広げてもらうことです。

今年のスタッフは、日本語教室の有志5人の他に、共催のEIWAN代表、福島大学の中川祐治先生、そして福島大学と東北学院大学の学生8人。講師として、伊達市立梁川中学校の穴戸雄一先生には高校進学の説明をしていただき、ボーイスカウトの日下

2016年11月19日

第2回ふくしま子ども&移住女性多文化フォーラム
参加者一同／福島移住女性支援ネットワーク／つばさ～日中ハーフ支援会／福島多文化団体～心ノ橋／日中文化ふれあいの会～幸福／ハングル学校宮城／山形ムグンハ学校／瀛華中文学校／上越中文教室

部誠一さんには趣向を凝らしたアイスプレイングウォークラリーなど、お楽しみ企画をそれぞれ実施していただきました。学生の中には、留学生や、自分自身が中学の時に日本の移住してきた方もいて、それぞれよきお兄さん、お姉さんとして子どもたちに接してくれました。

プログラムの内容を紹介します。

子どもたちに「期間中に1人以上新しい友だちを作ること」を約束させてプログラムを開始しました。

まず、大人も子どもも混成の班を作り、班対抗のゲームで雰囲気や和らげました。小学1年生を除いて、家族は同じ班にならないようにし、親離れ・子離れの良い機会。

ゲームで盛り上がったところで、次は2時間の勉強タイム。この時間は、ボランティアの学生と子どもたちがより親しくなるための時間です。この2時間、日本語や学校の勉強を一生懸命していた子もいれば、おしゃべりを楽しんだ子もいました。

この時間、同時進行で保護者対象の進路説明会を実施しました。中国語の通訳を入れて、高校入試の制度や内申点について詳しい説明がありました。「子どもを医者にしたいが、どの高校に入れたらいいか」など、真剣な質問も出ました。

磐梯青少年交流の家恒例の夕べの集いでは、高校3年生のウサマ君（パキスタン出身）が、堂々と日本語で団体紹介をしてくれました。

夕食後は、日本語の他に子どもたちの母語で絵本の読み聞かせをしました。中国語、英語、ロシア語、